

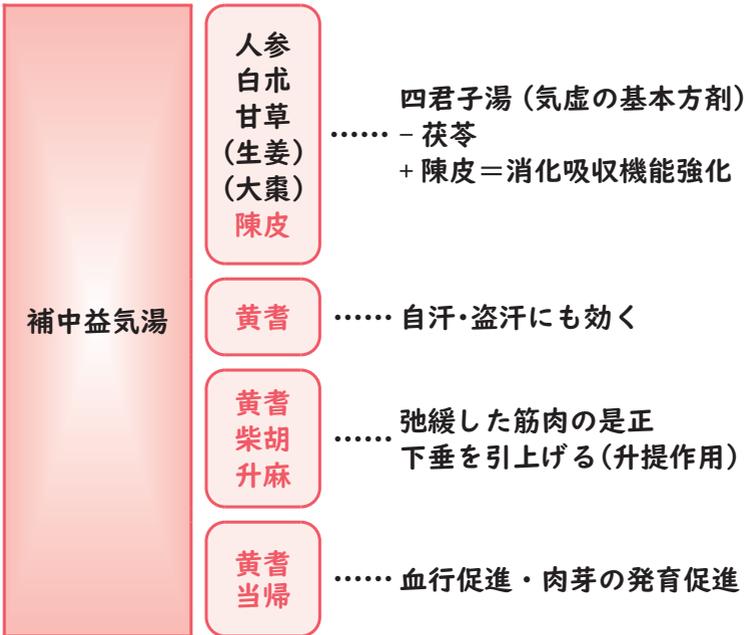
四君子湯去茯苓 + 黄耆 陳皮 升麻 柴胡 当帰

気虚の代表方剂②  
ほちゅうえつきとう  
補中益気湯

●「補中益気湯」とはどのような方剂なのか？

【構成生薬】

黄耆、人参、白朮、炙甘草、当帰、陳皮、升麻、柴胡、大棗、生姜



四君子湯に黄耆を加えると自汗・盗汗にも効く<sup>だいしくんしとう</sup>大四君子湯になる。補中益気湯は大四君子湯に理気の陳皮も加わった気虚の方剂である。黄耆を主薬にして柴胡・升麻を加え、弛緩した筋肉の緊張を正常にし下垂したもの

は持ち上げる。このアトニーの状態を「ちゅうき げかん中気下陷」と呼び、これを引き上げる作用を「しょうてい升提」という。

升提作用により括約筋の緊張低下の状態を引き上げ胃・腸アトニー、眼精疲労・弱視、膀胱の収縮力低下の状態、子宮脱・脱肛・直腸脱垂などを治す。無力性・弛緩性の筋肉の緊張を強くするが、過緊張や痙攣は起こさない。

**黄耆・当帰**は血管拡張作用があり血行を良くし、肉芽の発育を促進して潰瘍を治す。**陳皮・生姜・大棗**は健胃作用である。

### ●「補中益気湯」はどのような病態・疾患に効くのか？

補中益気湯は別名「いおうとう医王湯」といわれ、慢性疾患の気虚に対して頻用される。また慢性疾患治療の処方に合方することも多い。

病中病後、手術の前後や夏バテ、妊娠中や産後の疲労、体力低下、手足がだるいという訴えの者に有効である。また放射線・コバルト照射や抗生物質・抗癌剤などによる副作用防止、または治療に用いる。

## 生薬を学ぼう！

### おうぎ黄耆（微温性）

主作用＝補気，升提，固表止汗，利水消腫，内托

マメ科の根。滋養強壮剤としては人参と並び称される。内部が黄白色で軟らかい甘い香気のあるものが上品。山本巖曰く「噛むと甘いのがええ黄耆や。いっぺん噛んでみい」。

#### 【薬能】

**黄耆**の脾を補う補気作用はにんじん人参に似て、表を強化するのはけいし桂枝に似て皮膚近くの利水作用がある。少し動いたり、食事をしたりするとすぐに汗が